

第1章 川崎市の概要

1 自然的・地理的環境

(1) 位置・面積

ア 位置

本市は神奈川県北東部に位置し、東京都心部や横浜中心部にほど近く、北は多摩川を隔てて下流部より東京都大田区・世田谷区・狛江市・調布市に相對し、北西部は多摩川右岸の稲城・多摩・町田の各市に接しています。また、南は横浜市鶴見・港北・都筑・青葉の各区に接し、一部は鶴見川の本支流を境界としています。

イ 面積

本市は、およそ東西が 31km、南北が 19km で、北西部の丘陵地を除いて起伏が少なく、比較的平坦な地域で、面積は 144.35km²です。

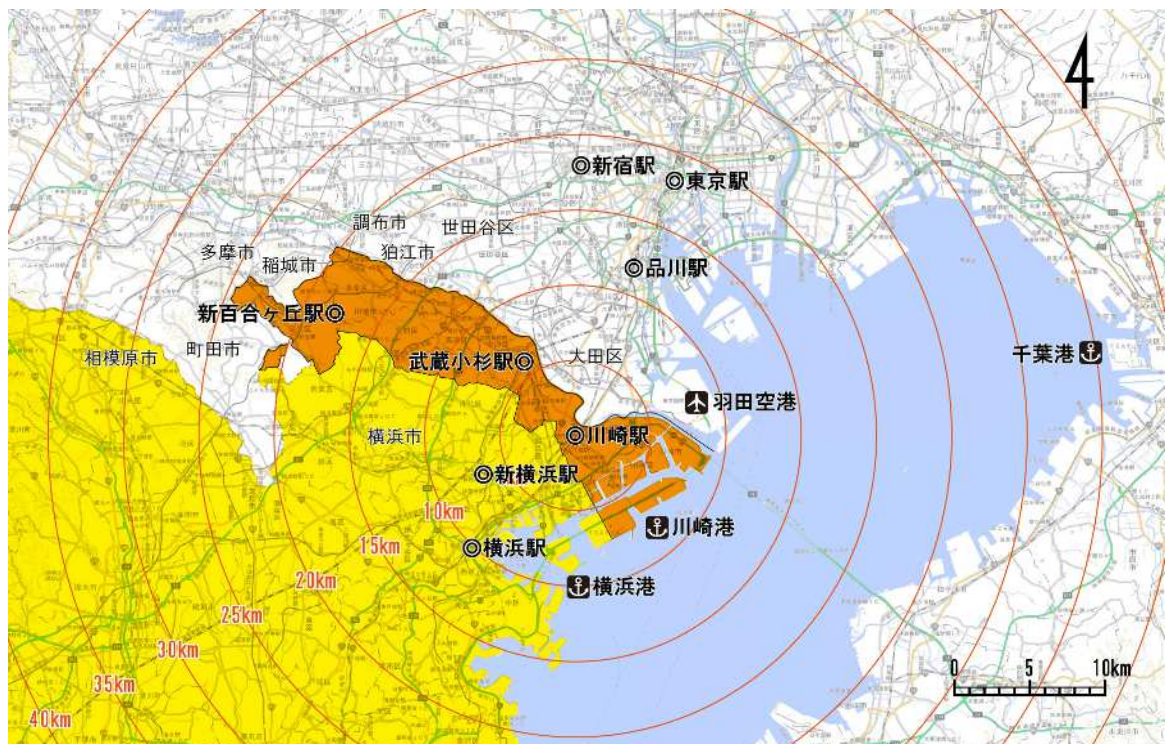


図4 川崎市の位置図／「地理院地図（電子国土 Web）」（国土地理院）を加工して作成

(2) 地形・地質

ア 地形

市域北西部に広がる多摩丘陵は、関東平野の西部に位置し、東京都八王子市から神奈川県横浜市まで南東に延びる丘陵です。市域の標高は最西部付近で最も高く 148m に達しますが、南東部に向かって次第に低くなり、丘陵の北側縁辺は急峻な崖地形を形づくっています。丘陵は、多摩川水系の三沢川、五反田川、平瀬川等や、鶴見川水系の矢上川、有馬川、真福寺川、麻生川、片平川等の小河川により開析され、分岐した小丘陵に細分化されています。多摩丘陵の東方には、丘陵地と 20m の比高差を持ち、緩やかな傾斜を示す下末吉台地が展開しています。この台地も多摩川支流の平瀬川、鶴見川水系の矢上川や有馬川等により開析され、分岐した小台地に細分化されています。

市域のほぼ東半分には、多摩川・鶴見川水系によって形成された谷底低地や三角州の平野が広がっています。多摩川中流域には、川筋の蛇行が原因の自然堤防と後背湿地の組み合わせによる自然堤防帯型平野が形成されています。下流域では、下末吉台地の南東に広がる低地に、標高 35m の独立丘陵である加瀬山が存在する以外は、東京湾の波浪や沿岸流によってかつての汀線に沿って形成された三角州平野が広がります。海成の砂州の微高地上には旧東海道が通っており、その東には標高 2m 以下の低地が広がっています。

多摩川河口から横浜市に続く東京湾に面する臨海部の開発は近世から始まり、大正時代から大規模に行われた工場用地の埋立地が広がっています。

イ 地質

丘陵地と台地の地表は関東ローム層に覆われていますが、基底部は不透水層の上総層群飯室層で形成されており、その間には、おし沼砂礫層が堆積し丘陵地の湧水を生み出しています。

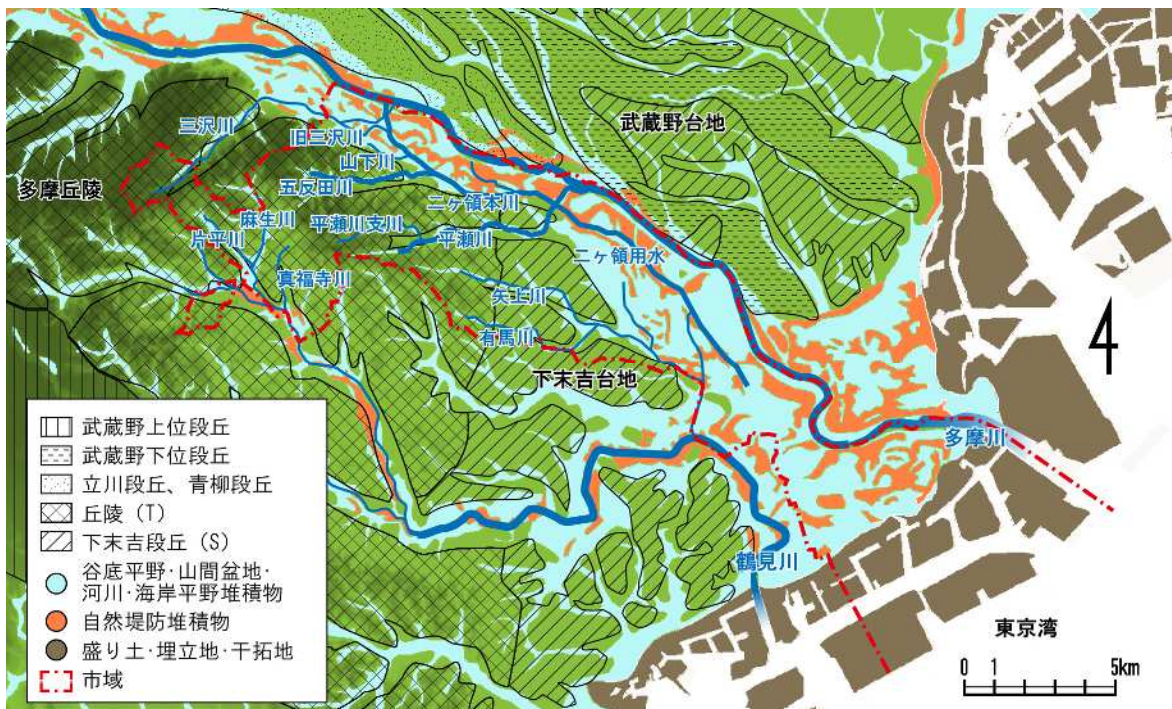


図5 川崎市の地形区分図／「地理院地図（電子国土 Web）」（国土地理院）を加工して作成

(3) 気候

市域は北緯 35 度 28 分（川崎区扇島）から北緯 35 度 38 分 23（多摩区菅野戸呂）の間にあって四季の変化に富み、比較的温暖な気候ですが、近年の年平均気温は、市内 3 地点（大師、中原、麻生）の全ての地点で上昇傾向が現れています。

真夏日（日最高気温が 30℃以上の日）、猛暑日（日最高気温が 35℃以上の日）及び熱帯夜（日最低気温が 25℃以上の日）の日数は増加傾向で、冬日（日最低気温が 0℃未満の日）の日数は減少傾向にあります。

降水量は、丘陵部では増加傾向が現れていますが、低地部で変化傾向は見られません。日降水量 50mm 以上の日数は、増加傾向が現れていますが、降水日数に変化は見られません。

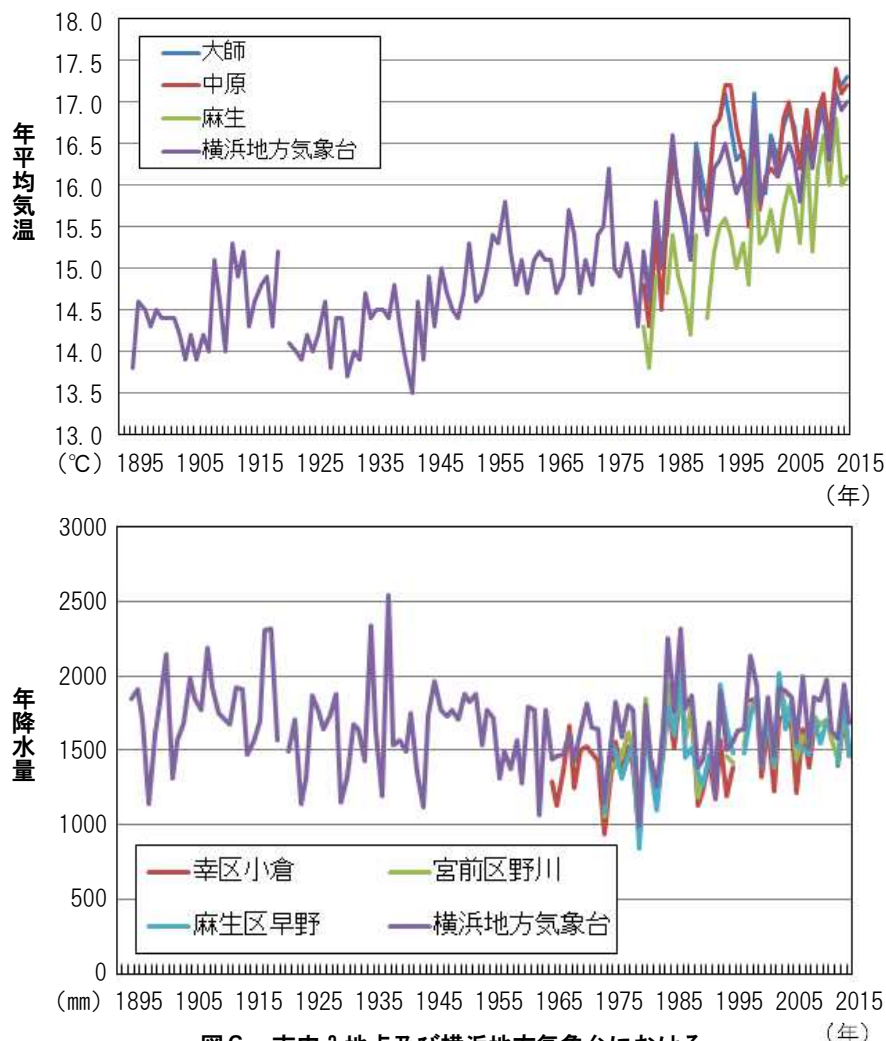


図6 市内3地点及び横浜地方気象台における
年平均気温（上）と年降水量（下）の経年変化

/出典：川崎市気候変動情報センター「川崎市気候変動レポート 2020」

(4) 生物環境

ア 植生

多摩丘陵東端部の雑木林は、江戸時代以降、薪炭林としての利用のため、薪炭材となるコナラが選ばれて管理されてきたことから、市内の台地や丘陵地の斜面部分にはコナラの多い雑木林が分布しています。昭和 30 年代以後、生活に必要なエネルギーが石油・ガス・電気に変化すると、コナラ林が管理されなくなり、植生遷移が進み常緑樹林の面積が増えています。市域のコナラ林では、高木層にコナラのほか、クヌギ、ヤマザクラ、イヌシデ、ミズキ、ハリギリ、シラカシ等の樹木が茂り、中高木層にはコブシ、エゴノキ、マルバアオダモ、ヒサカキ等、低木層にはヤマツツジ、マルバウツギ、ムラサキシキブ、ヤブムラサキ等の樹木が見られます。林床にはアズマネザサが密生していることが多いですが、近年は里山の自然を保全する市民活動団体等によってスミレや野生ラン等、多摩丘陵在来の植物が保全されるようになってきています。



雑木林



ハンノキ林

イ 水辺環境

市域の丘陵地基底部の上総層群飯室層の表面を伝って浸みだす湧水が谷戸の谷底部の水源となっています。早くから都市化したことにより谷戸の水辺が消失していったこと、丘陵地形が複雑なことが理由で、湧水の流出量は多くありませんが、少ないながらも湧水環境が保全されている谷戸では、ホトケドジョウやカワニナ、ホタル等が生息しています。

多摩川中下流域の河川敷は、様々な形で利用され、人の利用頻度の高い場所では在来の植物群落が消滅し、生命力の強いハルガヤ、ネズミムギ、シロツメクサ等外来種が繁茂しています。

川岸には上流から運ばれた豊かな土が堆積し、ヤナギ類を中心に自然に近い林（河畔林）ができています。これらの木々は川を吹き抜ける強風によって、倒木や枝折れし、出水により常に姿を変えています。

中下流域では約130種の鳥が確認され、そのうち水辺の鳥が約半数を占めており、通年でアオサギ、コサギ、カワウ、カワセミ等、秋から春にかけてはカモ類が見られます。

河口には砂浜や干潟があり、ヨシ、オギ、アイアシ等のヨシ原の植物やアシハラガニやクロベンケイガニ等のカニ類、塩沼地にはシオクグ、ホソバハマアカザ等が生育しています。砂浜のハマヒルガオやオカヒジキ、ツルナ等自然河岸の名残もみられます。鳥類はシギ、チドリ類、カモメ類のほか、絶滅危惧種のコアジサシ等も確認されています。



多摩川河口のヨシ原



ハマヒルガオ

2 社会的状況

(1) 人口

令和 6（2024）年 2 月 1 日現在の川崎市の人口は、1,545,385 人となりました。

各年 10 月 1 日現在の人口の自然増加比率〔自然増加比率＝（出生数－死亡数）÷人口総数〕は、21 大都市（東京都区部と政令指定都市）の中で、昭和 61（1986）年から 35 年連続 1 位です。

また、市民の平均年齢も大都市中、最も若く、生産年齢人口（15～64 歳人口）割合が最も高いことが特徴です。

将来の人口推計は、駅周辺を中心とした拠点開発の進捗と周辺地域への波及効果により、引き続き、当面増加傾向を示しています。令和 12（2030）年頃に約 160.5 万人となりピークを迎え、以降、自然減が社会増を上回る形で人口減少への転換が想定されます。年少人口は令和 2（2020）年頃の約 19.0 万人、生産年齢人口は令和 7（2025）年頃の約 106.0 万人がピークと想定されています。老年人口は当面増加を続け、令和 7（2025）年までの間に 65 歳以上の人口割合が 21.0%を超え超高齢社会が到来、令和 32（2050）年頃の約 47.5 万人がピークと想定されています。

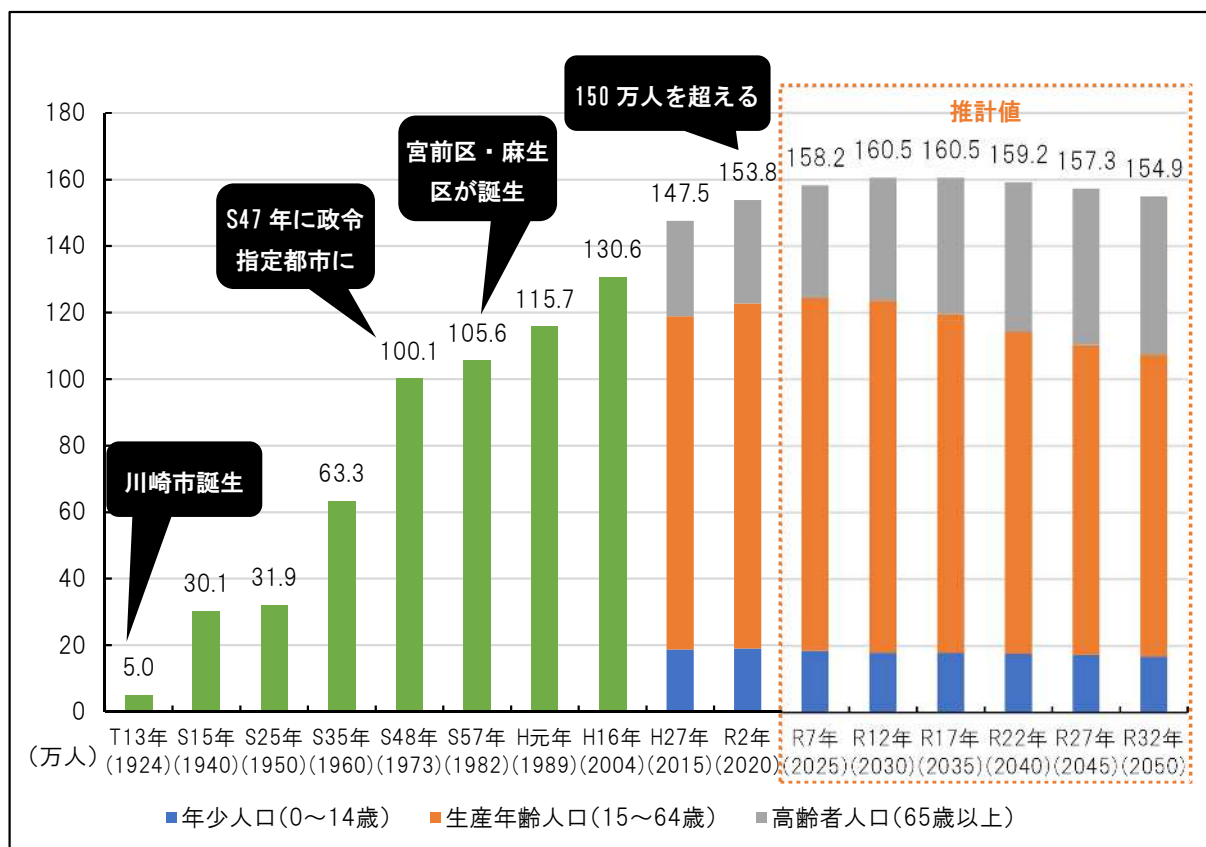


図7 川崎市の将来人口推計/出典：川崎市総合計画 第3期実施計画の策定に向けた将来人口推計（更新版）
※千人未満は四捨五入して記載している。

(2) 産業

ア 産業構造

近年は情報通信産業や医療・福祉分野の産業が増加してきており、相対的に全産業中に占める工業の割合が低下してきています。しかし、依然として、全国平均と比較しても工業が重要な地位を占めています。

産業別従業者数の推移を見ると、製造業を含む第2次産業は平成21(2009)年度以降、減少傾向にあります。

市の従業者数の推移は、平成21(2009)年に517,728人であったものが、平成24(2012)年には減少し、その後、平成26(2014)年には増加し、554,757人となり、平成28年(2016)年には10,945人減少しています。

平成28年(2016)の従業者数は、平成26(2014)年と比べると減少しているものの、平成21(2009)年、平成24(2012)年比では高い水準で推移しており、比較可能な平成21(2009)年以降においては、総じて増加の傾向にあるといえます。

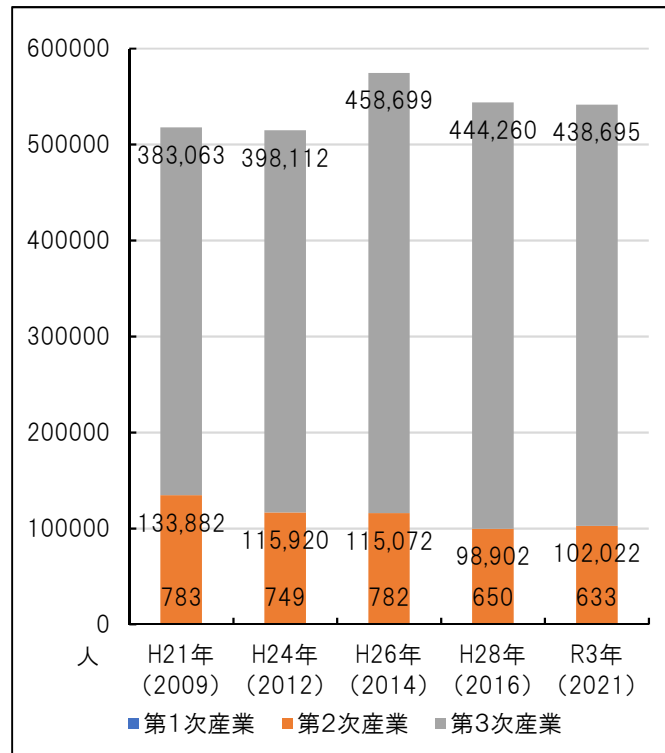


図8 川崎市の産業別従業者数(人)の推移
/「経済センサス-活動調査結果」より

イ 工業

川崎市は京浜工業地帯の一翼を担い、臨海部には石油・化学・鉄鋼等の重化学工業や、ライフイノベーション等先端産業に関連した企業、内陸部には電気機械・電子機器等高い技術や技能を持った、付加価値の高い製品を生み出すことのできるものづくり企業が集積しています。本市の製造業は、事業所数、従業者数は減少傾向にあるものの、高度な技術力や研究機関の収益を背景に生産性の高い事業所が立地しており、工業統計によると、従業者1人当たりの製造品出荷額・付加価値額は全国でもトップレベルに位置しています。

また、研究開発型企业、民間の研究機関が集積していることが本市の特徴であり、加えて高度な技術・技能を持った中小企業やICT関連企業も数多く立地しています。

ウ 農業

のらぼう菜や万福寺ニンジン(万福寺鮮紅大長人参)といった伝統野菜、葉物野菜や果樹、ハナモモやパンジー等の花卉等が生産されています。梨のもぎとりや芋掘り等観光農業や生産者直売、体験農業を通じた住民と農家の交流が盛んな典型的な都市農業です。しかしながら、市街地周辺の農地の宅地化等、都市化の進展の中で、農家数、農業就業人口、経営耕地面積とも減少の傾向が続いています。

エ 商業

本市の小売業の事業所数と従業者数の推移を、比較可能な平成 21（2009）年以降について見ると、事業所数は平成 24（2012）年には若干減少しましたが、以降は 7,000 事業所前後で推移しています。従業者数は、平成 24（2012）年までは 70,000 人弱でしたが、平成 26（2014）年には 70,000 人を超え、平成 28（2016）年は 70,171 人となっています。

従業者規模別に事業所数の増減を見ると、「1～4 人」の減少が大きい一方、「5～9 人」や「10～19 人」等で増加しています。また、従業者規模別に従業者数の増減を見ると、「200～299 人」が大きく増加しています。

オ 観光

川崎市は、東京や横浜、羽田空港等に近接し、アクセスに恵まれています。厄除けで有名な川崎大師、クヌギやコナラの林が広く分布し、多様な植物や野鳥が生息する川崎市内最大級の自然の宝庫「生田緑地」、向ヶ丘遊園跡地の川崎市ばら苑、「川崎市岡本太郎美術館」、「川崎市藤子・F・不二雄ミュージアム」、「ミューザ川崎シンフォニーホール」等の文化施設、「川崎市立日本民家園」、「川崎市青少年科学館」等の博物館施設があります。そのほか、多数の工場が密集する臨海部地域では、夜間にプラントに作業用の明かりが灯り、その夜間景観（夜景）は「工場夜景」として観光資源となっています。

(3) 土地利用

令和2(2020)年度の自然的土地利用面積は2,046haで、全市面積の14.2%となっています。一方、都市的土地利用面積は12,389haで全市面積の85.8%に上っていることから、極めて都市化が進んだ土地利用構成であることがわかります。都市的土地利用の内訳を見ると、住宅系土地利用が4,932ha(34.2%)と最も多く、都市的空地3,463ha(24.0%)、その他の建築用地1,780ha(12.3%)が続いています。

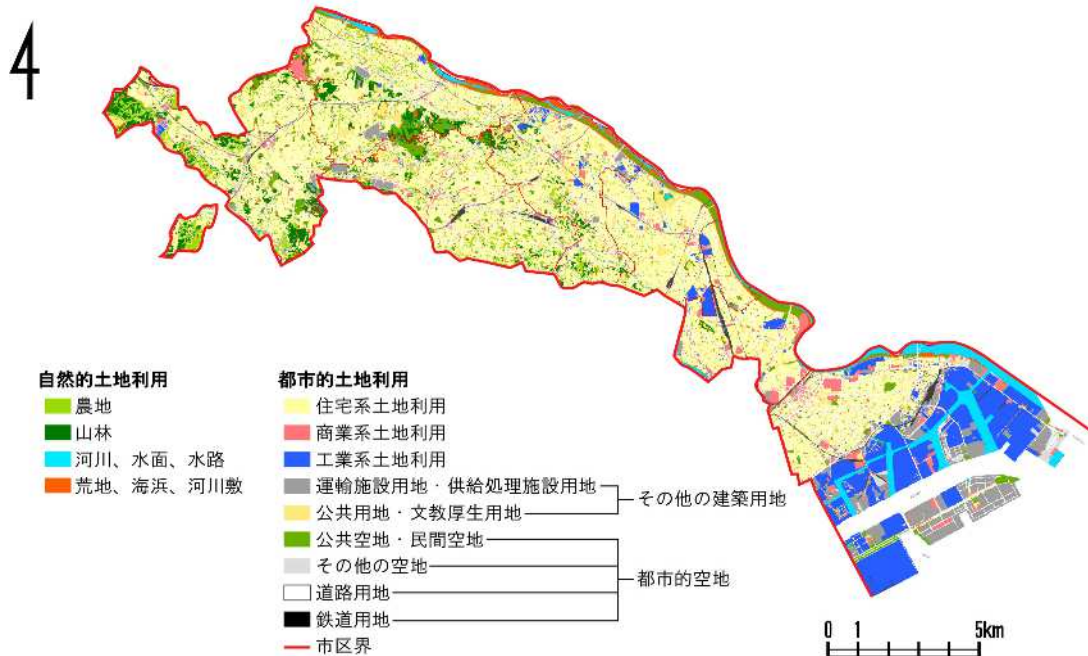


図9 土地利用現況図（出典：「川崎市の土地利用と建物現況」令和5年3月 川崎市）

(4) 交通

市域を縦断する方向に JR 南武線・京急大師線・小田急多摩線等の各線が通り、東京都心から放射状に延びる京急本線・JR 東海道本線・JR 京浜東北線・JR 横須賀線・JR 湘南新宿ライン・東急東横線・東急田園都市線・小田急小田原線・京王相模原線の各線が市域を横断しています。JR 川崎駅から JR 東京駅までは約 18 km、JR 横浜駅までは約 10 km で、川崎市の内陸部（武蔵小杉駅・溝の口駅・登戸駅）は、渋谷・新宿の副都心から 10～20 km の通勤圏内に位置しています。

路線バスは、地域公共交通の基幹的な役割を担う交通手段として、鉄道駅等へのアクセスを中心に市内各地や隣接都市に広がる路線網を形成しています。市域全体を川崎市バスがカバーするとともに、鉄道主要駅を起点として京浜急行バス、川崎鶴見臨港バス、東急バス、神奈川中央交通、小田急バスが運行しています。

幹線道路は、市域を横断する方向に高速湾岸線及び高速横浜羽田空港線、産業道路、国道 15 号、国道 1 号、第三京浜道路、国道 246 号、東名高速道路等が走っています。また、東京湾横断道路（東京湾アクアライン）を介して千葉県方面にも直結しています。

本市は、多摩川を挟んで東京国際空港（羽田空港）に隣接し、川崎港は港湾物流拠点として横浜港・東京港とともに、国内はもとより世界へ開かれた立地です。

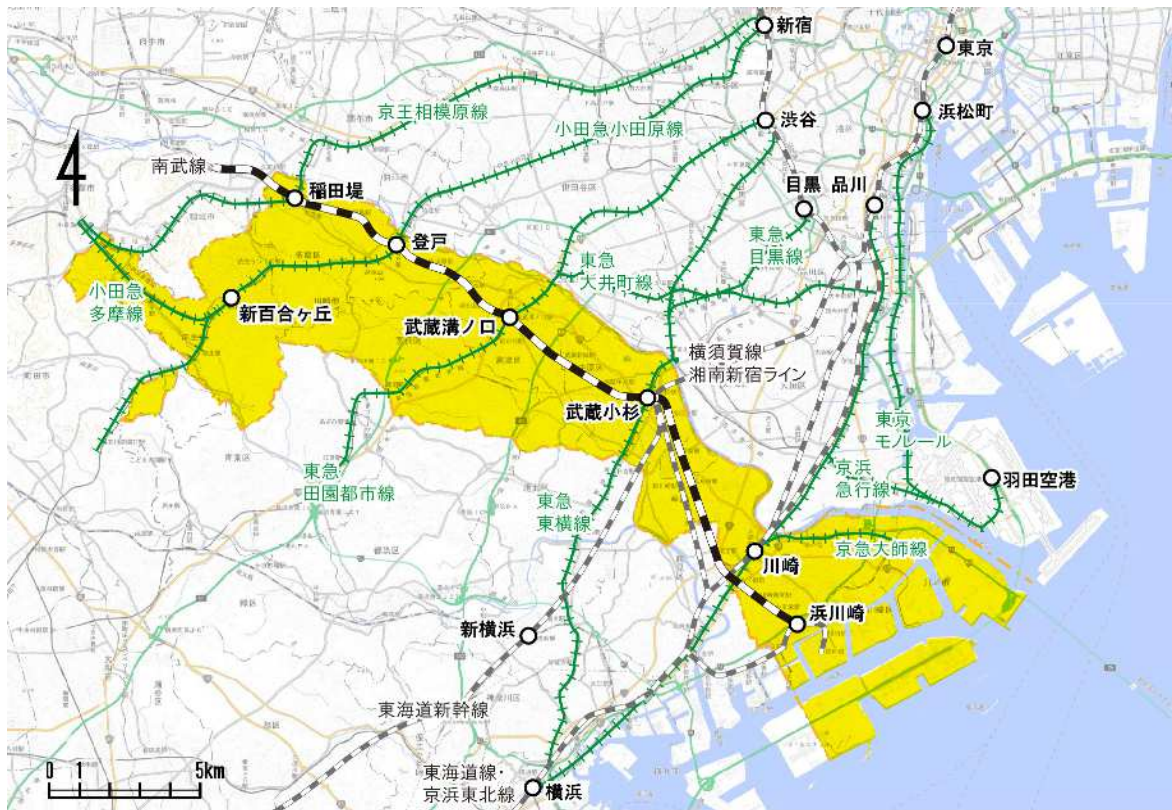


図 10 川崎市域周辺の主要な鉄道網/「地理院地図（電子国土 Web）」（国土地理院）を加工して作成

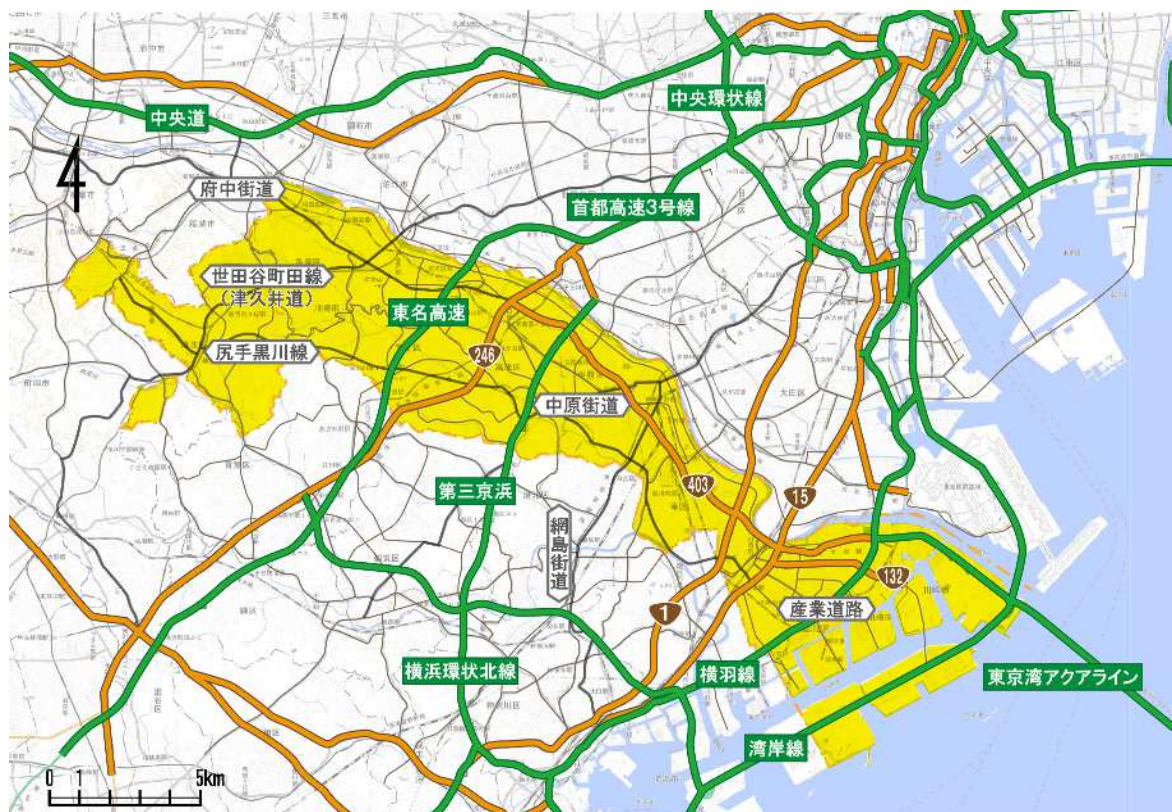


図 11 川崎市域周辺の主要な幹線道路/「地理院地図（電子国土 Web）」（国土地理院）を加工して作成

(5) 本市に所在する博物館施設

令和5(2023)年7月現在、本市には博物館法第2条に規定される登録博物館が2館あり、同法31条に規定される指定施設はありません。

また、博物館法には規定されていない博物館に類似する活動を行う、社会教育調査で分類される博物館類似施設が22館あります。

ア 川崎市立日本民家園（登録博物館）

江戸時代の民家を後世に残し、また、市民共通の「ふるさと」をつくることを目的に、昭和42(1967)年4月1日に開園しました。東日本の代表的な民家をはじめ、水車小屋・船頭小屋・高倉・農村歌舞伎舞台等25件の建物は、全て国・県・市の指定文化財です。

川崎市立日本民家園では、江戸時代の生活全般の再現に努めており、その家や周辺で使われていた民具や石造物等とともに収集し、園内各所や民家内で展示しています。

本館1階には、民家の建築過程や敷地の様子等の展示のほか、企画展示室があり、年に2回の企画展示を実施しています。また、敷地内には伝統工芸館があり、かつて川崎市でも行われていた藍染めが体験できます。

イ 川崎市立青少年科学館（登録博物館）

生田緑地に立地する自然科学系の博物館で、昭和46(1971)年にプラネタリウム館が開館、昭和57(1982)年に本館が完成しました。

平成24(2012)年4月28日に通称「かわさき^{そら}宙と緑の科学館」としてリニューアルオープンし、プラネタリウム設備及び一新された展示設備等を備えた自然学習棟と、資料収集や調査研究等の設備を備えた研究管理棟で構成されています。これらの設備や周囲の自然環境等を活用しながら、自然、天文、科学の3分野において、資料の収集・保存、調査・研究、展示・教育普及に取り組んでいます。

ウ 川崎市市民ミュージアム（博物館類似施設）

「都市と人間」を基本テーマに掲げ、博物館、美術館の機能を併せ持った複合文化施設として、昭和63(1988)年に開館しました。令和元年東日本台風の被害により、被災した川崎市市民ミュージアムは、浸水想定区域に位置すること等から、現施設のミュージアム機能を再開せず、被災リスクの少ない場所で再建を行うことを決定し、生田緑地ばら苑隣接区域を開設候補地として現在協議、調整を進めています。新たなミュージアムが開設されるまでには、相当の期間を要することから、令和5(2023)年10月に川崎市市民ミュージアムを仮施設へ移転し、被災収蔵品の修復等を推進するとともに、オンラインや他施設での企画展、出張形式での教育普及事業等、博物館・美術館活動を引き続き実施しながら、新たなミュージアムの設置に向けた検討を進めています。

エ 東芝未来科学館（博物館類似施設）

昭和 36 (1961) 年に株式会社東芝の創業 85 周年を記念して開館した「東芝科学館」が、川崎駅前に「東芝未来科学館」として平成 26 (2014) 年 1 月にリニューアルオープンしました。

館内は、様々な先進技術で人々の暮らしを変えてきた東芝の歩みを振り返るヒストリーゾーン、実験やワークショップを通じて子ども達が科学技術を楽しく学ぶサイエンスゾーン、そして、東芝が目指すスマートコミュニティの未来に触れる展示ゾーン等があり、新しい技術がつくる未来を実際に体感することができます。

オ ミットヨ測定博物館（博物館類似施設）

武蔵溝ノ口駅の近くにあり、株式会社ミットヨが運営しています。産業の発展を支えた精密測定機器に特化し、その進化の歴史を展示した世界でも例を見ない専門博物館で「沼田記念館」と「測定機器館」で構成されています。

沼田記念館では、昭和 9 (1934) 年のミットヨ創業以来の歩みと測定機器の進化の歴史を、測定機器館では世界の長さ測定機器を中心としたルーツと変遷を知ることができます。

カ 電車とバスの博物館（博物館類似施設）

東急田園都市線宮崎台駅に隣接し、東急電鉄株式会社が運営しています。東急線の旧型車両の展示、H0 ゲージの模型が走る「パノラマシアター」、子どもが運転できる「東横線 CG シミュレーター」、プロ仕様の「8090 系運転シミュレーター」、親子が並んで操作できる「キッズシミュレーター」、N ゲージの模型レンタルもある「N ゲージパーク」等、大人から子どもまで楽しめる博物館です。

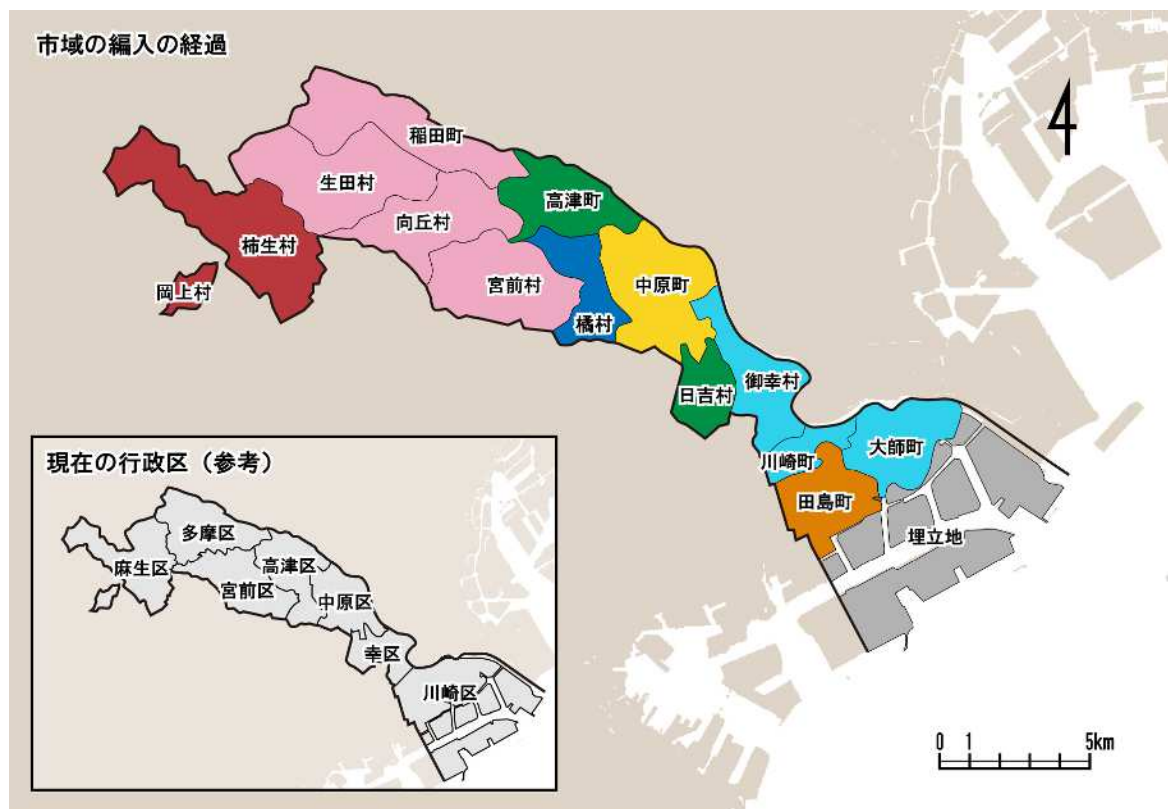
キ その他の博物館類似施設

- | | |
|--------------------|-------------------|
| ・川崎市夢見ヶ崎動物公園 | ・東海道かわさき宿交流館 |
| ・川崎市緑化センター | ・若宮八幡宮・金山神社資料館 |
| ・川崎市平和館 | ・川崎市教育委員会地名資料室 |
| ・川崎市大山街道ふるさと館 | ・明治大学平和教育登戸研究所資料館 |
| ・中村正義の美術館 | ・川崎市公文書館 |
| ・常楽寺（まんが寺） | ・小黒恵子童謡記念館 |
| ・川崎市岡本太郎美術館 | ・カワスイ 川崎水族館 |
| ・川崎市藤子・F・不二雄ミュージアム | ・川崎浮世絵ギャラリー |
| ・ニヶ領せせらぎ館 | |
| ・大師河原干潟館 | |

3 地区の概要

(1) 市の成り立ち

大正 13（1924）年に川崎町、御幸村、大師町の合併で川崎市が誕生してから、多摩川に沿って隣接する町村を市域に編入しながら拡大していったため、市域は多摩川に沿って東京湾から細長く伸びています。川崎の地名は多摩川の河口付近に位置することによって由来していると考えられています。昭和 47（1972）年に政令指定都市に移行し区制が敷かれ、5 区が誕生しました。その後、昭和 57（1982）年に行政区再編成が行われ、7 区が置かれています。市域の拡大の経過は下図のとおりです。



区分	合併年月日	経過
	大正 13（1924）年 7 月 1 日	橘樹郡川崎町・御幸村・大師町を廃し市制施行
	昭和 2（1927）年 4 月 1 日	橘樹郡田島町を編入
	昭和 8（1933）年 8 月 1 日	橘樹郡中原町を編入
	昭和 12（1937）年 4 月 1 日	橘樹郡高津町、及び日吉村の一部を編入
	昭和 12（1937）年 6 月 1 日	橘樹郡橋村を編入
	昭和 13（1938）年 10 月 1 日	橘樹郡稲田町・向丘村・宮前村・生田村を編入
	昭和 14（1939）年 4 月 1 日	都筑郡柿生村・岡上村を編入
	昭和 16（1941）年 12 月 10 日 ~ 平成 8（1996）年 7 月 30 日	埋立地及び市境変更

図 12 市域の拡大（町村名は合併当時のもの）/「地理院地図（電子国土 Web）」（国土地理院）を加工して作成

(2) 各区の特徴

ア 川崎区 (かわさきく)

昭和 47 (1972) 年の政令指定都市移行時に幸・中原・高津・多摩とあわせ 5 区で誕生しました。区名は市と同名で、中枢的機能を持つ地区としてふさわしいとして「川崎区」が選ばれました。東海道五十三次の宿場町である旧川崎町、川崎大師平間寺の門前町である旧大師町、臨海部の工場で働く人々の住宅地として発展してきた旧田島町の 3 地区と臨海部の埋立地で構成しています。市の玄関口である川崎駅の東口周辺地区は、官公庁や商業・サービス業等が集積する中心市街地として一層充実した都市機能を有する魅力ある地域資源が豊富なまちです。

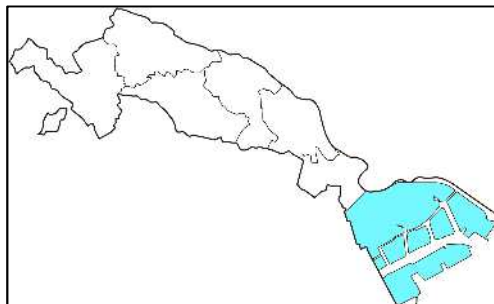
平成 25 (2013) 年には、旧東海道川崎宿の歴史や文化を後世に伝え、地域活動や地域交流拠点となることを目指して「東海道かわさき宿交流館」が整備されました。

臨海部の殿町地区では、国際戦略拠点「キングスカイフロント」として、ライフサイエンス・環境分野等の先端技術や研究開発拠点の整備が進んでい

ます。東扇島地区では、市内唯一の人工海浜を有する東扇島東公園や、展望室からの夜景が日本夜景遺産に認定された川崎マリエン等が市民の憩いの場になっています。さらに、臨海部の工場や事業所等の生産現場を訪れる産業観光や、羽田空港へとつながる多摩川スカイブリッジが開通し、新たな川崎の魅力として脚光を浴びています。また、外国人住民人口が市内で最も多く、多文化共生のまちとしての特色も見るすることができます。

区の木は、銀杏と長十郎梨ちょうじゅうろうなし、区の花はビオラとひまわりです。長十郎梨は大師河原が発祥の地で、大正から昭和にかけて梨の代表的な品種として盛んに栽培され、多くの人々に親しまれました。地域の歴史とともに語り継がれるよう、区の木として制定しました。

人口 230,695 人 世帯数 126,159 世帯
面積 40.25 km² 人口密度 5,732 人/km²
※令和 6 (2024) 年 2 月 1 日現在



川崎区

イ 幸区 (さいわいく)

区の名称は、明治 17 (1884) 年に明治天皇が観梅のため行幸したことを記念して名付けられた旧村名「御幸」の一字を残し「幸区」としました。市の南東部に位置し、多摩川、鶴見川及び矢上川に囲まれた地形で、市内で中原区に次いで 2 番目に人口密度の高い区です。JR 川崎駅西口に接している南河原地区、公共施設が多い御幸地区、加瀬山等歴史資源が多い日吉地区の 3 つの地区からなります。

近年、JR 川崎駅西口、鹿島田駅、新川崎駅周辺を中心に、大規模集合住宅の建設が続いており、子

人口 172,587 人 世帯数 82,664 世帯
面積 10.09 km² 人口密度 17,105 人/km²
※令和 6 (2024) 年 2 月 1 日現在



育て世帯を中心に人口の増加が進んでいます。JR川崎駅西口には、「音楽のまち・かわさき」を代表する「ミューザ川崎シンフォニーホール」、大規模商業施設「ラゾーナ川崎プラザ」、「KAWASAKI DELTA」が立地するほか、北口通路西側デッキが整備され、新たなまちづくりが進むとともに、市内外から多くの人が集まり、更なるにぎわいを見せています。

また、JR新川崎駅に隣接する新川崎・創造のもり地区では、慶應義塾大学の研究施設「K2 タウンキャンパス」、「かわさき新産業創造センター（KBIC）」、「産学官共同研究施設（NANOBIIC）」、「産学交流・研究開発施設（AIRBIC）」があり、世界最先端の研究開発が展開されています。一方で、加瀬山には加瀬台古墳群や加瀬台遺跡があるほか、市内唯一の動物園である「夢見ヶ崎動物公園」があり、都市空間と自然空間が調和したまちとなっています。

平成24（2012）年に、区政40周年を記念し制定した区の木はハナミズキ、区の花はヤマブキです。



幸区 川崎駅西口付近

ウ 中原区（なかはらく）

中原区は、東西に細長い市のほぼ中央に位置し、区域の大部分は多摩川に抱かれた平坦部ですが、横浜との市境の井田地区には緑の残る丘陵地が広がっています。

「中原」という名称は、中原御殿〔徳川家康の鷹狩等の際の休泊所（平塚市）〕と江戸を結んでいた中原往還（中原街道）の中継地としての仮御殿が小杉にあったことに由来しています。

交通の利便性が良く、都心部のベッドタウンとして宅地化が進み、近年では武蔵小杉駅周辺の工場跡地にタワーマンションや商業施設が次々に建設され、特に若い世代の人口が急増し、市内で最も人口が多い区です。

また、企業の研究・開発部門等がJR南武線沿線に集積し、商業施設が多く立地していることから、市内外から訪れる人も多く、全国的にも注目されるまちとなっています。

一方で、多摩川に面し、区内を流れる二ヶ領用水^{にかりょうようすい}や渋川沿いの散策路では、桜並木やモモの花が楽しめ、緑豊かな住環境が整っています。また、広大な敷地を誇る等々力緑地には、「等々力陸上競技場」や「とどろきアリーナ」、「等々力球場」といったスポーツ施設のほか、ふるさとの森、釣池のレクリエーション施設が集まり、市民の憩いの場となっています。

人口 266,447人 世帯数 139,455世帯
面積 14.81km² 人口密度 17,991人/km²
※令和6（2024）年2月1日現在



中原区 武蔵小杉駅周辺

区の木モモは、果樹栽培が盛んであった明治から昭和初期にかけて区内で多く栽培され、当時は全国でも指折りの産地であったことに由来し、平成 27（2015）年に市制 90 周年を記念して区民の投票により制定しました。

また、下小田中地区^{しもこだなか}ではパンジーやシクラメン等の花卉栽培が盛んです。特にパンジーは品質に高い評価を受けており、かながわブランドや「かわさきそだち（川崎市の農産品ブランド）」に認定されています。このことから、平成 10（1998）年に、区制 25 周年を記念し、パンジーを区の花に制定しました。

エ 高津区（たかつく）

高津区は、多摩川や二ヶ領用水の流れる平坦地と多摩丘陵の一角を形成する丘陵地、さらにそれらをつなぐ多摩崖線の斜面緑地によって構成され、豊かな水辺空間と起伏ある地形が特徴です。区の名前は、明治 22（1889）年に溝口村・二子村・久地村・下作延村・久本村・諏訪河原村・北見方村・坂戸村が合併してできた高津村に由来します。

江戸時代から二子の渡し、矢倉沢往還を中心とした交通の要所として発展し、独自の商業文化が栄えました。また、歌人・小説家の岡本かの子や陶芸家の濱田庄司、岡本太郎等多くの芸術家が輩出しています。さらに、二ヶ領用水久地円筒分水（国有形登録文化財）、本市初の国史跡である橘樹官衙遺跡群^{しぼくちかいづか}、神奈川県指定史跡の子母口貝塚や由緒ある神社仏閣があり、歴史的・文化的資産に恵まれています。

「大山街道ふるさと館」は、大山街道（矢倉沢往還）の歴史・民俗・自然等に関する貴重な資料の保存・展示を目的に開設され、地域活動や文化活動の拠点としても利用されています。

一方、最先端技術産業をものづくりの面から支える中小の加工組立型企業が集積し、研究開発型企業の育成・交流等を目的とした「かながわサイエンスパーク（KSP）」があります。溝口駅周辺地区は、商業ビル「ノクティ」を中心とした商業地域が形成されています。さらに、溝口駅前ペデストリアンデッキ「キラリデッキ」、溝口駅南北自由通路、溝口駅南口広場等の整備により、都市基盤の整備も進展しています。また、脱炭素戦略（かわさきカーボンゼロチャレンジ 2050）のモデル地区となっています。

区南部の橘地区では、豊かな自然を活かし野菜づくりを中心とした農業も盛んで、近隣の消費地に出荷するとともに、市内の学校給食の食材としても使われています。

区制 30 周年を記念して制定した区の木と花は、梅とスイセンです。梅は、近代には北原白秋ら文人墨客や観光客に親しまれにぎわった久地梅林等をはじめ、昔から区民に親しまれた木であることに由来しています。

人口 235,011 人	世帯数 117,654 世帯
面積 17.10 km ²	人口密度 13,743 人/km ²
※令和 6（2024）年 2 月 1 日現在	



高津区 溝口駅前のキラリデッキ

オ 宮前区 (みやまえく)

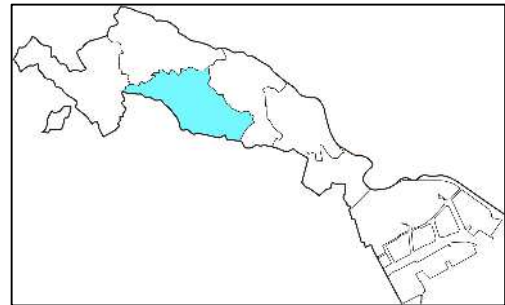
宮前区は、川崎市の北西部、多摩丘陵の一角に位置しています。昭和 57 (1982) 年の行政区再編成に伴って高津区から分区しました。区の名前を付けるに当たり、①歴史的な由来からふさわしいと思われる区名であること、②簡潔で親しみやすい区名であること、③他の区の名称と紛らわしくないことが条件とされ、明治 22 (1889) 年に馬絹^{まぎぬ}、有馬、梶ヶ谷、土橋、野川の 5 ヶ村が合併して 1 村になった際に、名付けられた「宮前」が採用されました。宮前村は、村役場が置かれた馬絹神明神社南側から梶ヶ谷神明社南側に及ぶ馬絹字宮ノ前の字名から村名がとられ、「宮前」を「ミヤサキ」と呼んでいました。

区内には、弥生時代から古墳時代にかけての集落遺跡である**東高根遺跡**や横穴式石室をもつ**馬絹古墳** (いずれも県指定史跡) といった歴史的に貴重な史跡が残されています。また、**木造薬師如来両脇土像** (国指定重要文化財)、**影向寺薬師堂** (県指定重要文化財) が所在する野川本町の「影向寺」等、地域の歴史を語る文化財も多くあります。

昭和 30 年代後半から丘陵地で大規模な宅地造成が行われるようになり、昭和 41 (1966) 年に東急田園都市線の溝の口から長津田までの延長、昭和 43 (1968) 年の東名高速道路・東名川崎インターチェンジの開通・開設等により交通網が整備されると、急激な人口増と都市化が進みました。一方、東高根森林公園や菅生緑地等区内には緑地も多く、憩いの場として多くの人々が訪れ自然に親しんでいます。さらに、「カッパーク鷺沼」には、鷺沼ふれあい広場やフットサル施設「フロンタウンさぎぬま」等があり、区のシンボルゾーンとして活用されています。

また、区の名産品の宮前メロンをイメージした区 PR キャラクター「宮前兄妹 (メロー・コスミン)」は様々なイベント等で活躍し、区民に親しまれています。平成 10 (1998) 年度の「区イメージアップ事業」の一環としてサクラとコスモスを区の木・花に制定しました。

人口 234,981 人 世帯数 106,211 世帯
面積 18.60 km² 人口密度 12,633 人/km²
※令和 6 (2024) 年 2 月 1 日現在



宮前区 東高根森林公園

カ 多摩区 (たまく)

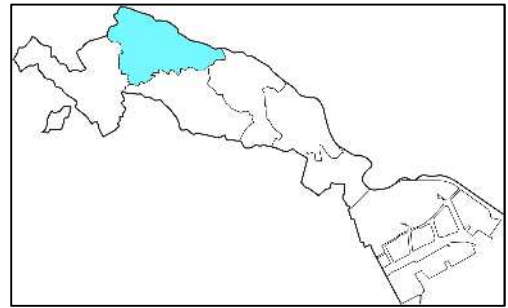
多摩川や二ヶ領用水が流れ、南部に多摩丘陵が広がる多摩区は、都心への交通手段等に恵まれていることもあって、昭和 30 年代以降に急速に都市化が進みましたが、多摩川梨の栽培が盛んだった農村地帯としての景観は現在も随所に見られます。区の名称は多摩川と多摩丘陵の景観にちなみ、市民の投票により選ばれました。

人口 225,192 人 世帯数 119,014 世帯
面積 20.39 km² 人口密度 11,044 人/km²
※令和 6 (2024) 年 2 月 1 日現在

特に、多摩丘陵に位置する生田緑地には、約120haの広大な緑の中に、世界的に著名な芸術家である岡本太郎の作品を収蔵する「川崎市岡本太郎美術館」や東日本の古民家を中心に集めた「川崎市立日本民家園」、春と秋に一般開放する「川崎市ばら苑」、世界的に人気のある漫画「ドラえもん」等の原画が鑑賞できる「川崎市藤子・F・不二雄ミュージアム」、世界最高水準の星空を映すプラネタリウム投影機「メガスターⅢフュージョン」を備えた「川崎市青少年科学館（かわさき^{そら}宙と緑の科学館）」があり、市民に親しまれています。

また、区内の大学に多くの学生が通うことから、学びのまちとしての一面もあります。

区の木は区民からの公募により平成8(1996)年にハナミズキ、ナシ、区の花はモモ、スミレに決定しました。ナシやモモは特産品として多摩区の歴史を伝える象徴、区内の丘陵地や自然林に咲く野性のスミレは自然を残し護る象徴として選ばれました。



多摩区 生田緑地

キ 麻生区（あさおく）

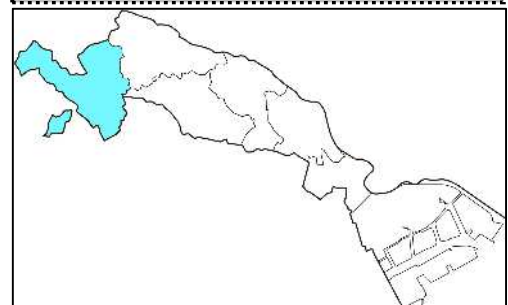
麻生区は昭和57(1982)年、川崎市の行政区再編によって、多摩区から分区し誕生しました。麻生の名の起こりは、8世紀頃から朝廷への貢ぎ物だった麻布の原料である麻（^{ちよま}苧麻）を広く産した地であったことによると伝えられています。鎌倉時代に王禅寺で発見されたといわれ、「^{かきお}柿生」の地名の由来にもなった^{ぜんじまる}禅寺丸柿（国登録記念物）は、区の木になっています。

昭和40年代から宅地開発が進められ、昭和49(1974)年に区を中心となる新百合ヶ丘駅が誕生し、百合丘の地名の由来となった「ヤマユリ」が後に区の花となりました。

現在、新百合ヶ丘駅周辺には、麻生区総合庁舎、「麻生文化センター」、「麻生スポーツセンター」があるほか、駅南側には大型ショッピングセンター、映画館等からなる商業地域が形成されています。また、「昭和音楽大学」、「川崎市アートセンター」、「日本映画大学」等芸術関連施設も多く、芸術・文化の薫りあふれるまちとなっています。

一方、区内にはエレクトロニクスや先端技術の研究開発施設が集まる「マイコンシティ」等の産業資源、「王禅寺ふるさと公園」、市内農家が生産した農産物を販売する大型農産物直売所「セレスモス」、「明治大学黒川農場」等、豊かな自然や農業資源が多く存在します。

人口 180,472 人	世帯数 81,907 世帯
面積 23.11 km ²	人口密度 7,809 人/km ²
※令和6(2024)年2月1日現在	



麻生区 黒川